

思われます。

葉王菩薩の捨身について

——捨身における供養と布施をめぐって——

市川智啓

かけがえない己の身体を投げ出すという捨身は、婆羅門の為に身を投げ出す兎の捨身説話等、ジャータカ以来、多くの經典中に取り込まれ、特に菩薩行の利他を強調する大乘經典においては、『涅槃經』をはじめとして捨身を勸奨する文句と共に様々な捨身譚が説かれている。むろん、このような捨身譚において重要なことは、捨身したという事実よりも、捨身によって仏を法を尊重した、或は衆生への慈愛を全うしたという遵法の精神なのである。

しかし、真摯なる己の気持ちを表明するが故に、その信仰している経文そのままに捨身を行う僧が、五C半ばより諸の僧伝に多く伝えられ、中でも葉王菩薩の如き焼身・焼指者は三十名を数える。『妙法華』や『梵網經』

の流布と呼応するこの捨身の流行は、しかしながら、捨身自体を苦行の延長として捉え、大衆の面前にてのみ行う等、その目的となる供養や布施よりも、捨身という行為そのものが重要視されてしまったと思えるのであるが、このような供養と布施との混同は、經典上にも見られる。

例えば『妙法華』葉王品において、日月淨明德仏に對して葉王菩薩の前身である一切衆生喜見菩薩が行った焼身供養を諸仏が称える部分では、羅什は *puṇya* を「供養」に、*dana* を「布施」或は「施」と梵本と同様に區別して漢訳している。だが、一切衆生喜見菩薩が焼臂供養を終った後、釈尊が仏塔供養の功德を述べる部分にては、*dāna* に比されるべき *pariyāga* を「供養」と訳出している。では、*pariyāga* は全て「供養」と訳出しているのかというと、その直前では「布施」と訳されている。

つまり、梵本にては *puṇya* と *dāna* を別の行為として區別し、使用されているが、漢訳する時点で「供養」も「布施」も同義語的な扱われ方をされてしまっているのである。確かに供養も布施も同一範疇の実踐行動を伴うものであるが、それが表面的な言葉の差異として、異

音同義語的な扱いを受けてしまっている。大乘布薩の行儀規範となった『梵網經』にても「……一切の餓鬼にまで応に悉く身・肉・手・足を捨て而も之を供養すべし」として、捨身布施が捨身供養とすり代わっている。

このようなことから、布施なり供養なりの方法の一つでしかなかった捨身が、その両面を満たす目的として捨身者たちに認識されてしまい、彼らの心理的支えの一つになっていたと思えるのである。

「日蓮における救済の構造」

——即身成仏と靈山浄土——

間 宮 啓 壬

聖人が描く救済の世界を垣間見ようとする時、矛盾するかに見える二つの要素が併存していることに気づかされる。一つは、この娑婆世界において現身のままに成仏を果たそうとする「即身成仏」の思想であり、もう一つは、世界表象的な「靈山浄土」への死後における往詣を説く、所謂「靈山往詣」の思想である。本発表では、一

見したところ矛盾しているかに見えるこうした二つの思想が敢えて提示されている点に着目し、そこに却って聖人における統一的な救済の構造を見いだすことができるのではないかという問題意識の下、考察を進めていくことになる。

聖人において「即身成仏」思想と「靈山往詣」思想とが併存するに至るのは、文献学的に確かな遺文によると、佐渡流罪期に入ってからのことであるが、結論的に述べるならば、両者はいずれも一念三千を軸に構想された救済論であって、理論的には矛盾するものではあり得ない。前者は、妙法五字の受持に即した、久遠仏の功德としての一念三千の譲与を、後者は、一念三千世界への、即ち久遠仏によって成就された超越的領分への直接的参入を説くものであり、両者はいずれも「一念三千の成仏」に他ならないからである。しかし、とするならば、聖人が両者を敢えて併存せしめた理由はどこに求められるべきなのであろうか。

聖人は即身成仏を説くことにより、確かに妙法五字の受持を実践する当所における成仏を保証した。しかし、それはあくまでも久遠仏の功德を譲与されたという宗教的自覚の上に成り立つ成仏であって、妙法五字の受持を